様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22560606
研究課題名（和文）スリランカにおける植民都市、都市型住居の形成とその現代的展開に関する研究

研究課題名（英文）Formation and Contemporary Transformation of Colonial cities and Urban Dwellings in Sri Lanka

研究代表者
山田 協太（YAMADA Kyota）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教
研究者番号：40434980

研究成果の概要（和文）：

イギリス植民地期スリランカでは、欧風住居と、主たる居住者である非欧系の人々の活動した環インド洋の地域的ネットワークの様々な文化との混成をつうじて多様な居住地が形成された。建物や場所の呼び名の変化から、国民国家発足後、そうした多様性はナショナルなものへ塗替えられたことが分かる。既存の住居から展開した商業建築に注目し、近年、国家の枠を超える環インド洋の都市間の多様な連環が人々の経済活動をつうじて再活性化していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

A major urban residence type in the British colonial period was Dutch town house, a residence which was introduced by Dutch during the seventeenth century. However, many of those who built and dwelled these houses in the 19th century were non-European. Through a focus on their religious institutions, we can get an overview and history of different residential areas shaped around these institutions.

These residential areas had their particular economic relations with places in the island of Ceylon, Coromandel coast, Malay, Singapore, etc. in the British colonial period.

But such trans-Indian Ocean activities were suppressed during a certain time after the establishment of a nation state in 1948.

Focusing on buildings called “lodge” and “super market” which have transformed from Dutch townhouses, this research clarified that connections between different cities around the Indian Ocean, which goes beyond the framework of the nation state, have been re-vitalizing in recent years through individual economic activities of private sectors.

Understandings of histories of respective living environments and their mutual connections give insight for living environment design.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学、都市計画・建築計画
キーワード：住宅論、南アジア、人間居住環境、開発と援助

１．研究開始当初の背景

植民地経験を有する多くの国と地域にとって、植民地期に形成された都市および建築をいかに評価しこれと共存するかは、きわめて現代的な問題である。
16 世紀以来、ポルトガル、オランダ、イギリスと度重なる植民地統治を経験したスリランカは、植民地期に形成された都市核と住居が現代都市の基礎となっている。
これらの植民地遺産を継承しながら世界的に重要な都市として拡大した典型的事例であるコロンボに焦点をあて、植民都市とその住居を前提条件とした開発、居住環境向上の実際とその課題を明らかにする。

２．研究の目的

建築学、都市計画学では、開発を推進する立場から、かたちづくられた物理的空間とその変容に着目して、計画手法の有効性を評価する立場がある。これに、政策的側面、および居住者の適応という２つの視点を重ね合わせることで、何のために、どのような、という開発の目的や在り方の評価を含めて、植民都市遺産の活用と居住環境改善をめぐる現実的課題を浮かび上がらせるのが本研究の狙いである。そのために具体的に明らかにすることは以下の３点である。
①植民地期における都市型住居の形成と変容
②独立後の都市計画、開発と植民地期の政策との関係
③居住者による植民地期の都市型住居の流用と転用

３．研究の方法

近代の学問体系は、自然科学と社会科学に 2 分化され、それぞれがさらに領域を細分化してきた。このことは建築学、都市計画学においても当てはまる。専門化、定式化することで、明快な枠組みと切口で対象を鋭く描くことが可能となった。一方でそれは、現実への対応能力の希薄化をも伴ってきた。建築学、都市計画学におけるこれまでの蓄積に加え、臨地研究において参与観察や、アクター・ネットワーク論など、最近の地域研究で培われてきた手法と理論を援用することで、対象の立体的描写が可能になると期待される。アクター・ネットワーク論は、空間において生起する出来事や事象を、人、モノ、言葉の異種混交のネットワークとして捉え、それらを動態として記述、分析する手法である（Latour, B., We have never been modern, Harvard Univ. Press, 1993)。建築学、都市計画学が従来おこなってきた空間の編成にとどまらず、人、制度との複合として成立している人間環境の編成を考察の対象とすることで、研究成果には、居住環境の理解に基づく実効性のある開発、居住者自身による主体的な居住環境形成への筋道を示す実践的意義が期待される。

４．研究成果

平成 22 年度

関連文献の収集とレビューに重点を置き、開発との関連を踏まえて、植民都市の研究を含む都市研究の研究史をまとめた。そこで得られた展望は以下の３点である。
・それぞれの都市とその居住文化は、地域の視点と文脈に基づいて理解することが重要である。
・都市は、異なる要素、主体によって構成される。具体的日常生活の動態はそれらの相互関係をつうじて描くことができる。
・諸要素、諸主体はしばしば、特定の都市を超えた空間的拡がりの中で作用し、活動する。それらが媒介となって都市や村落は連動し、地域の文脈を形成する。

これらの知見を踏まえながらコロンボおよびジャフナの歴史的街区において居住実態に関する臨地調査と資料収集をおこなった。臨地調査から、人々の居住と集合の仕方、あるいは経済活動、都市を超えた範囲の人々の交流を理解する鍵として、寺院、モスク、教会という宗教施設の重要性が見出された。またコロンボにおける日常生活を把握するために、典型的住居に起居して参与観察をおこなった。

資料収集をつうじて明らかとなったのは、居住環境の改善を目的とする開発事業は多くおこなわれてきたのに対して、それらの資料、記録は散在しており、蓄積されていないことである。

同時に、コロンボの主要な移住集団であるタミル人の出身地であるタミル･ナードゥを訪れ、居住文化に関する資料収集をおこなった。研究者間でミーティングは随時おこない、問題意識の共有を図るとともに調査手法の

検討をおこなった。
これらの知見を踏まえて来年度以降の研究トピックとして、宗教施設を中心とした居住空間の構成とそこにおける都市型住居の役割、および、居住環境改善事業の実例とその後の展開の追跡調査、を見出した。

平成 23 年度

都市を巡る先行研究のレビューをつうじて定めた都市を眺める視座をもとに、本年度はフィールド調査をつうじて、コロンボに居住する多様な集団と居住環境の分布、およびその歴史的形成を明らかにした。各集団の移動の指標として宗教施設の立地、建設年代、建設者に着目することで、都市内にとどまらずセイロン島内やコロマンデル海岸、遠くはマレー半島、シンガポール、ベトナムにおよぶ、具体的な人を介した都市間の結びつきを明らかにすることができた。このことは、スリランカにおける植民都市と都市型住居の形成を環インド洋地域において進行した共時的事象として位置づけ、非ヨーロッパ系居住者とそのネットワークの意義を考察する上で大きな成果であった。

フィールド調査のもう 1 つの成果として、コロンボにおける特徴的な居住環境と都市型住居をいくつかのタイプとして把握することができた。また、典型的住居に起居する参与観察を継続しておこなった。

いずれのフィールド調査でも、居住者のライフ・ストーリーの聞取り、場所や建造物の呼称とそこでの出来事の聞取り、風景／景観をあらわす写真など視覚資料の収集に焦点をあてた。

平成 24 年度

以上の研究成果を踏まえて、最終年度は複数の特徴的居住環境を選定し、そこでおこなわれる日常生活に特に注目して、人間、物質、制度の合成としての居住環境の現在的動態を明らかにすることとした。さらに、こうして得られた日常生活および居住環境の特質と動態に関する知見をその居住者とともに検討し、望ましい居住環境の成立を可能とする要件を探ることとした。また、可能であれば小規模な物理的介入を試みることとした。

特徴的居住環境として特に焦点を当てたのは、シンハラ人、タミル人とならぶ主要な民族であるムスリムの居住地である。そこにおける日常生活と景観、住居や路地などの物理的配置の 3 つの要素に着目し、それらの相互作用として成立している居住環境の、植民地期および国民国家成立以降の動態を明らかにした。また、居住環境の変容が、国民や国家の追求したナショナリズム、経済開発から影響を受けつつも、日常生活を基礎とする独自の論理によって進展したことを明らかにした。

また以上を踏まえて、居住環境を理解する上での基礎的視点を提示した。加えて、居住者自身による主体的な居住環境形成の試みとして、調査地において居住者とともに集会所兼学習塾の建設プロジェクトを提案した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①山田協太、ガウス・モイディーン・マーワタ（コロンボ）からスリランカを眺める—ナショナリズム、経済開発と日常生活の展開、報告書「近代アジアにおける植民地都市と商業・金融・情報ネットワーク」、査読無、2013 年、全 54 頁

②<u>山田協太</u>、日常活動の集積からハブ都市コロンボとベンガル湾海域世界の動態を考える—宗教施設の立地から見る 17 世紀以来の都市ネットワークの変容、総合地球環境学研究所・メガ都市プロジェクト 全球都市全史研究会報告書、査読無、第 8／9／10 巻、2013、pp. 44−65

③<u>Kyota YAMADA</u>、Global Environment and Mega Cities: Cognitive Science, Science for Design and Human-World Interaction Approach、Abstracts of Papers Presented at International Symposium Cities Under Change、査読無、2012、pp.21-23

④ <u>Kyota YAMADA</u>、Consideration on Unfolding of South Indian Merchant Activities and Formation of Port City Colombo: A Sketch of Organization and Transformation of Urban Space since the 18th Century、日本南アジア学会第 24 回全国大会概要集、査読無、2011 年、pp.17-18

⑤<u>Kyota YAMADA</u>、From Modern Urban History to Connected Urban History: Reconsiderati-on of World Perspective from a Viewpoint of Colonial City Studies、総合地球環境学研究所・メガ都市プロジェクト 全球都市全史研究会報告書、査読無、第 4／5 巻、2011、pp.88-99

⑥<u>山田協太</u>、近代都市研究から連関的都市史へ - 植民都市から世界の見通しを考える - 、*Kyoto Working Papers on Area Studies*、査読無、No.103、2011、pp.1-73

⑦<u>Kyota YAMADA</u>、A Review on Historiography of Modern Urban History: Reconsideration of World Perspective from a Viewpoint of Colonial City Studies、*Proceedings of the 8th International Symposium on Architectural Interchange in Asia*、査読有、2010、pp.543-548

〔学会発表〕（計 5 件）

①Kyota YAMADA、Viewing Sri Lanka

from a Perspective of New Moor Street and Ghaus Moidheen Mawata, Colombo、International Conference on Islam and Multiculturalism: Islam, Modern Science, and Technology、05 Jan. 2013、Kuala Lumpur, Malaysia

②Kyota YAMADA、Global Environment and Mega Cities: Cognitive Science, Science for Design and Human-World Interaction Approach、International Symposium Cities Under Change、17 Oct. 2012、Kolkata, India

③Kyota YAMADA、Urban Micro Activities as Driving Forces of Transformation of Colombo City and Indian Ocean: Urban Networks since the 17th Century、JSPS Asia and Africa Science Platform Program Islam and Multiculturalism: Between Norms and Forms Seminar、27 Nov. 2011、早稲田大学

④Kyota YAMADA、A Review on Historiography of Modern Urban History: Reconsideration of World Perspective from a Viewpoint of Colonial City Studies、8th International Symposium on Architectural Interchange in Asia、12 Nov. 2010、Kitakyushu International Conference Center, Kitakyushu, Japan

⑤ Kyota YAMADA 、Consideration on Unfolding of South Indian Merchant Activities and Formation of Port City Colombo: A Sketch of Organization and Transformation of Urban Space since the 18th Century、日本南アジア学会、1 Oct. 2011、大阪大学

〔図書〕（計１件）

①Kyota YAMADA、"Dynamisms in the Hub City of Colombo and the Urban Networks around the Bay of Bengal from the Viewpoint of Daily Activities: The Locations of Religious Architecture from the 17th Century", in Naoko Fukami ed., *Islam and Multiculturalism: Between Norms and Forms*、Organization for Islamic Area Studies (Waseda University)、2012、pp.79-101

６．研究組織

(1)研究代表者

山田　協太（YAMADA Kyota）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教
研究者番号：40434980

(2)研究分担者

足立　明（ADACHI Akira）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
研究者番号：90212513